Vol.64-No.02　　2012 年 7 月

阿佐ヶ谷教会

# 信友会 会報

## 6 月例会 (6 月 24 日開催) 報告

「使徒言行録の学び」(第３回)　　棚村　恵子先生

―新約聖書　使徒言行録　第３章、４章―

棚村恵子先生の プロフィール

１９４９年生まれ。山口市出身。東京女子大学文理学部史学科卒業。シカゴルター派神学校（Lutheran School of Theology at Chicago）卒業（アメリカ宗教史専攻）。帰国後青山学院大学大学院および青山学院女子短期大学で非常勤講師（アメリカ研究、アメリカ宗教史）、聖ヶ丘教会担任教師を務めた後、２００９年より東京女子大学准教授（キリスト教学）。２００９年教団の正教師按手礼を受領。阿佐ヶ谷教会に昨年より出席。著書『アメリカ　心の旅』日本キリスト教団出版局、１９９８年。『しなやかに夢を生きる：青山学院の歴史を拓いた人、ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』青山学院、２００４年。

信友会６月例会は、「使徒言行録」第３、４章について、棚村恵子先生に講解いただきました。棚村恵子先生は、現在、東京女子大学の現代教養学部人文学科の准教授としてキリスト教学を教えておられ、阿佐ヶ谷教会に出席しておられます。第３章の「ペトロの思い」を熱く語られました。

◆――――――――――――――――――――――――◆

「私が持っているもの、それをあなたに」　　棚村　恵子 先生

最初に、クリーニング業の「白洋舎」を創業され、日本で最初にドライクリーニングを取り入れた五十嵐健治さんが９６歳の生涯を終えるときに、「何もかも忘れたが、キリスト様のことは忘れません」と言われました。五十嵐さんは、日本のクリーニング業界を牽引された人ですが、熱心なクリスチャンで白洋舎をキリスト教精神により経営され、後半生では熱心に伝道活動をされていた人物です。私たちも人生を終える時に五十嵐さんのようにキリストしか知らないと言える者でありたいと思います。

（次ページへ）

◎ 2011 年度データから見る信友会 ( その 3)

1. 阿佐ヶ谷教会教会員の内男性は 195 人（全体 638 人）
その内信友会員は 156 人です（男性の 80%）

2. 昨年の礼拝平均出席者数の信友会員は 55 人（全体 190 人）
昨年の信友会例会の平均出席者数は 26 人（内 14 人は役員）

結論：考えましょう！

男性の 8 割が信友会員　（156 人）
信友会員の礼拝平均出席率は 35%　（55 人）
例会への平均出席率は 16%　（26 人）

（前ページより）

「イエスの名をめぐって」

使徒言行録の第３章と第４章は、「イエスの名による」癒しの奇跡物語とペトロの説教で構成されます。ここでは、第３章１～１０節で、生まれつき足の不自由な男の「イエスの名」による癒しの物語。１１節～２６節のペトロの説教と第４章のその後の収監と議会での、「この人をイエスの名が強くした」こと、「イエスの名」をめぐる議会でのペトロの説教に続いて行きます。

この物語は、美しい門の傍らでの物語です。この門の所在ははっきりしないが、この物語には神聖な神殿の門と傍らに物のように置かれた男というある種の皮肉を含んでいます。ペトロとヨハネは午後３時の祈りに神殿に出かけたときに、生まれつき足の不自由な男が門の傍らに置かれているのを見ます。神殿へ礼拝に行くのはユダヤ人には欠かせないものであり、この門の傍らはこの男にとって施しを乞うには絶好の場所でした。４章２２節にはこの男は４０歳になっていると書かれています。長い間毎日この場所に置かれて施しを乞う日が続いたのです。ルカ福音書１８章９節以下には、イエスが神殿で祈る偽善者を諫める喩として２人の祈りの喩をあげます。ファリサイ派の人は、自分は奪い取る者、不正な者などではなく、週に２回断食し、全収入の十分の１を捧げると祈ったこと。徴税人は頭を天に上げることもできず、ただ神さまに罪人である私をお許し下さいと祈った。イエスはこの２人のうち義とされるのは徴税人であると諭しています。美しい門の傍らは、見せかけの祈りや形式的な献金をする偽善的な人々にもプレッシャーをかけて施しを受けるベストな場所であったと思われます。しかしこの男にとっては、単にお金を集めるために置かれているのは屈辱であり、その悲しみはいかばかりであったかと思わざるをえません。

マルチン・ブーバーと言うユダヤ人哲学者が書いた『我と汝』と言う著作では、我と汝には人格的な関係が生ずるが、「我とそれ」では、単なる物であり自身の存在は金を徴収するマシンであり、言葉もかけられず通り過ぎられる存在です。９０年代に「家なき子」とういドラマがあり、「同情するなら金をくれ」と言うキャッチコピーが流布しましたが、不幸な子供が社会を斜にかまえて見ている姿が表現されていました。

施しをする人には４種類あります。深く同情して金を出す人、同情はしないが金を出す人、同情も金も出さない人です。そしてペトロとヨハネは同情はするが金を出さなかったのです。そして、ペトロはその男をじっと見つめて、「私には金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と言って右手を取って彼を立ち上がらせました。するとたちまちその男は、足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、そして歩き回ったと言うのです。ペトロがその男をじっと見たことには経験がありました。ルカ福音書の２２章６１節に、イエスの裁判を見ていたペトロが３度イエスを否定した時に、「イエスが振り向いてペトロを見つめた」とか書かれています。このイエスの眼差しに、その憐れみと慈しみがあり、使徒にされた思いを持ちました。イエスの深い眼差しは、４福音書のうち、ルカ福音書にだけに書かれている表現であり、ルカはイエスの深い眼差しを、使徒言行録のこの場所にも書き加えています。

この男にとっても、ペトロが、目と目を合わせたことに本当に驚いたと思います。初めて物としてではなく人格としての自分が認められたことを感じることができました。ここで、ペトロは本当にお金を持っていなかったのでしょうか。ルカ福音書９章の１２人の派遣や、１０章の７２人の派遣では、「旅には何も持って行ってはならない、杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も２枚は持ってはならない」とか書かれている。イエスはただ『福音の力』

すなわち「イエスの名」を持って派遣したのです。

ペトロは、この時もこの男に自分の最も大切な宝である「ナザレのイエスの名」によって立って歩くようにさせています。そしてこの男は、神を讃美して境内に入って行きました。人々はこの男が、美しい門の傍らで施しを受けていた者であることに気づき、沢山の人々が集まり、その男の身に起こったことに我を忘れて驚いています。

詩編８４編１１節に、「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵です。主に逆らう者の天幕で長らえるよりは、わたしの神の家の門口立っているのを選びます」とあります。この男は、美しい門に置かれているのでなく神殿で祈る者に変えられた喜びを心の底から表現したのです。

『ペトロの説教』

ペトロは多くの人が集まったのを見て、ソロモンの回廊で話し始め、この癒しの業はわたしの力や信心によるものではないと言います。そしてイエスは旧約聖書の成就として神さまから遣わされたメシアの業であると言います。一方には、イエスの十字架の死と復活を認めず、メシアであることを認めない人たちがいます。この同胞ユダヤ人に対して、あなた方がイエスをピラトに引渡し殺してしまった悪を、神はご自分の救済計画に変えられて、イエスによる私たちの救いのために復活させたと言います。１５節には「あなたがたは、命の導き手である方を殺しましたが、神はこの方を死者の中から復活させました。私たちはその証人です」。そして、美しい門の傍らの男を癒したのは、「イエスの名」による業であり、イエスによる信仰が、あなた方一同の前でこの男を完全に癒したと言います。そして、アブラハムを通して約束された選ばれた民としての祝福は、このイエスを通して成就されると主張しています。ペトロと周辺の人々との「イエスも名」をめぐる対立は、当時の状況では大変危険なことでした。後のキリスト者への迫害へと向かいます。

１７～１９節は、悔い改めの呼びかけをします。今の時はイエスが来られた時と、再び来られる時の間の時になります。「既に」と「未だ」の間の時です。この時は、十字架につけて殺した皆さんにも自分の罪を悔い改めるチャンスがあると言っています。

２０節からは、終末について語ります。主のもとから慰めの時が訪れるとか、万物が新しくなるその時までという表現はイエスの再臨の時を示します。その時までに悔い改める機会があるのです。モーセ預言として、「神はあなた方のなかから預言者を立てられる。彼が語りかけることには聞き従いなさい。そうでなければ滅ぼし絶えさせる」と話します。ペトロは、アブラハムなど旧約の預言者に約束したように、神は自分の僕を立てて私たちに遣わしてくださったと言っています。

第３章の課題は、「私が持っているもの、それをあなたに」ですが、教会の持っている宝は、「キリストの名」であり、それを相手に提供することです。真の礼拝者になりたい。私と神と汝という人格関係に変えられる喜びを持ちたいという欲求に応えるのが教会の使命ではないでしょうか。私たちがいろいろするのも大事ですが、相手の方が本当の意味で「我と汝」の関係の中に生きる我になれること、キリストの名を知ることによって、強くなり、立ち上がって、喜びを持って歩むことができる存在へと招くことではないかと思います。

美しい門と言う象徴的な門をあげてルカがこの物語を書いている意図に注目してこのエピソードを語りました。

（文責：玉澤武之　写真：小笠原敦久）